

やま お たか のり
山 尾 貴 則

| | |
|---------|--|
| 学位の種類 | 博士(文学) |
| 学位記番号 | 文博第 181 号 |
| 学位授与年月日 | 平成17年1月13日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 研究科・専攻 | 東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 社会学専攻 |
| 学位論文題目 | G. H. ミード「社会心理学」の研究 —「科学の方法」論を手がかりに— |
| 論文審査委員 | (主査) 教授 高城 和 義 教授 吉原 直 樹 教授 正村 俊 之 助教授 永井 彰 助教授 木村 邦 博 |

論文内容の要旨

本論文は、G.H.ミードの「科学の方法」に関する一連の議論(以下「科学の方法」論と略記)の論理構成を解明し、次いで「科学の方法」と一体のものとして彼のいわゆる「社会心理学」をあらためて検討して、彼の理論の持つ新たな側面を探ることを目的としている。

周知の通り、我が国におけるスタンダードなミード理解を確立し、広くミード理論を普及させたのは船津衛である。船津のミード研究の最大の特徴は、ミードの理論を人間の主体性を理論づけるものとして解釈するところにある。船津のこうしたミード解釈は、官僚制化や管理社会化の進行により人間の主体性が喪失されていくという時代状況を受けて展開されたものであった。しかしその後安川一が、ミードのねらいはむしろ社会組織化のメカニズムの解明にあり、そのメカニズムとして自我の社会的生成の論理が示されたと主張した。さらに彼はそのメカニズムが集団間の対立や葛藤を生む原理ともなってしまふことを指摘し、ミードの議論にある種の限界があることを明らかにした。安川のこの指摘に対しては、徳川直人が理論的応答を試みている。彼は安川の指摘を認めつつも、やはり人間の主体性の検討がミードの関心事であったと判断し、あらためてミードの議論を検討している。その際徳川は、「科学の方法」を民主社会におけるディスコースの論理として読み込むことが必要であると主張した。徳川のこうした「科学の方法」論の解釈は、多少の差異をはらみつつもミード研究者においてはほぼ共有されていると見てよい。しかし、ミードの「科学の方法」をこのようにとらえるスタンスについては、ミードの理論とは理想の個人と理想の社会について述べる楽観的なものだったのではないかという疑念にさらさ

れることになり、現在あらためて「科学の方法」論の検討が要請されつつある。

日本におけるこうしたミード研究の活発化は、1980年代以降の海外の諸研究によって、ミードが社会の諸問題に実践的に関与し続けたことが明らかとなったことにも大きな影響を受けている。ただしここでいう実践的とは、ミードが社会実践活動の実際の担い手となったということと同時に、眼前の問題状況に関して行われる種々の経験的研究にコミットしていたということをも含む。このうち、ミードの携わった経験的研究において彼がどのような仕事を行ったのかを検討してみると、社会問題に対する彼の方法態度が見えてくる。すなわち、“現場”から得られる様々なデータをもとに、問題当事者には必ずしも意識されていない“隠された事実”を明らかにすることを通して、眼前に広がる“問題”をとらえ直し、問題解決の糸口をつかみだすというものである。こうしたミードの「実践」をささえた方法こそ、彼が「科学の方法」と呼んだものであった。

このことをふまえ、あらためてミードが遺した種々の議論を概観してみると、彼が社会心理学を生涯論じ続けていたのと同時に、「科学の方法」について常に論じ続けていたことに気がつく。だがミードのこうした側面は残念ながら等閑視されてきた。筆者は、ミードの社会心理学は「科学の方法」論といわば車の両輪のような関係にあり、「科学の方法」論をミード理論の基軸に据えることが彼の社会心理学をより深く理解することを可能にしていると考えている。そこで本論文では、まず第2、3章でミードの「科学の方法」論を讀解し、彼の思考のいわば基礎視角を確定することをこころみた。ついで、「科学の方法」論の讀解で得た知見をふまえ、第4章ではミードのいわゆる社会心理学を検討した。その際には『精神・自我・社会』をテキストとして利用するが、それが講義録であり多くの編集が加えられているという事情に留意して、各種の資料を補足的に用いた。最後に第5章において、第4章までの議論を要約的に概観した上で、ミードの「科学の方法」論をふまえて社会心理学を検討し、両者を一体のものとしてとらえるという作業によって、いかなるミード像が結像するかを示し、それが持つ意味を探った。

第2章では、ミードの「科学の方法」論の論理構成を検討した。ミードが「科学の方法」論の理論的出発点におくのは、当代においてそれ自身が進化をとげた進化論の知見である。ミードの見るところ、それに基づけば、倫理の進化という現象を認めうる。すなわち個体と環境とは相互規定的な関係にあって、進化とは環境に個体が適応するという現象なのではなく、個体による環境の構築という側面も見られる。ミードはこの見方が我々の倫理についても適用されうると考えている。つまり我々の倫理は永遠不変の固定したものではなく我々の行為と相互規定的な関係を持っており、常に再構成され新たなものになっていく。ミードはこのことを確認した上で、我々の倫理が崩壊した結果として生じているかに見える道徳問題をいくつか取り上げ、それらの問題に対して我々が聖職者のように抽象的な罰を与える限り問題の解決にはいたらないことを指摘した。そうした方法に代えて、ミードは「科学の方法」を用いて見過ごされてきたものを発見するという作業の有効性を主張した。すなわち、見過ごされてきたものの発見を手がかりとして問題が生じるメカニズムを解明し、問題が生じる社会条件を再調整していくことによって問題が解決するにいたる。そのように社会が再構成されれば、それと相互規定的関係にある倫理もまた、再構成されるということになる。

ミードのこの「科学の方法」論は、彼の「科学の方法と、考える個人」と題する論文においてさらに詳細に検討されている。ミードはこの論文で、古代ギリシアの哲人たちの思考から当代における実証主義、合理主義における思考法に至るまでの思考の営みにおいて、個人において生じている「見過ごされてきたもの」、すなわち「例外的事例」がどのように取り扱われていたのかという観点からそれぞれの知の営みを検討している。それによれば、古代ギリシアの哲人にとって科学の営みとは魂がかつて見たアイデアが観察対象に宿っているのかどうかを確かめることであり、観察とはアイデアを体現する個物の収集

を意味していた。そうした営みにおいては、個人に生じた例外的事例はアイデアを体現しないものとして無視されることになったし、そうした例外的事例を生み出してしまった個人はアイデアの体系を脅かす存在として排除された。このように、古代科学においてはアイデアの世界を想定し、その現れとしてすべての対象をとらえんとするがゆえに、個人に生じた例外的事例の重要性は全く認められなかった。

ミードの見るところ、古代科学において排除されていた個人の例外的な経験に目が向けられ、その意味と意義が問われることになったのは、カントとロマン主義的観念論においてであった。ミードによれば、カントは我々諸個人が何らかの対象を経験すること、そのことがまさに現実世界における対象のあり方を規定すると考えていた。つまり、個人の経験は排除の対象ではなく、逆に我々の経験の出発点に据えられることになった。しかし同時に、ミードの見るところ、カントは個人の経験の重要性に目を向けたが、結局のところ個人の経験がそのような経験として生じるためには、経験に先立って一定の形式が存在していなければならないと考えていた。しかもカントは、そうした形式がどのようなものであるかについて我々は知り得ないと考えた。すなわちミードによれば、カントは、統覚が経験の形式をあらかじめ規定しているが、それは我々の先験的に与えられているがゆえに経験においてとらえることはできないと主張した。

ミードはこの点、すなわちカントがいわば我々の認識には限界があると考えていることをカント哲学の難点と見なしている。ミードによれば、そうした難点はロマン主義的観念論において克服されている。すなわち、カントとロマン主義的観念論がアンチノミーをいかに扱うかについての差異から、ミードはロマン主義的観念論の特質を見いだしている。ミードによれば、カントはアンチノミーが我々の認識が限界に来ていることを示していると考えていた。それに対して、ロマン主義的観念論においては、アンチノミーは世界の再構成の出発点であって、世界はアンチノミーをきっかけにより高次の段階へと至ると考えられていた。ミードはロマン主義的観念論の、アンチノミーを介した世界の絶えざる変容という見方において、個人の例外的事例の意味と意義が十全に表現されるようになったと見ている。

だがミードの見るところ、当代の実証主義および合理主義は個人に生じる例外的事例が世界を変化させていくことを適切にとらえ得てはいない。ミードによれば、実証主義者はまるで神の声を聞くことができる聖職者であるかのように、諸事象のすべてを余すところなく説明し尽くすような究極の法則体系を追求しようとしている。ミードは、そうした実証主義の論理においてはそもそも例外というものが存在し得ないと見ている。すなわち個人に生じた何らかの出来事がある法則から説明し得なかったということが生じても、それは“今は説明され得ないがやがて究極の法則体系が知られるときには適切に説明されうるもの”として処理され、現在の法則ないし理論の存立それ自体に影響を与えるようなものと考えられることがない。ミードはこのように例外的事例がまさに例外として取り上げられるのではなく、既存の理論の枠内でのみ解釈される点を批判している。また、ミードによれば、合理主義者は我々の経験を分解する。合理主義者はそうした作業から、経験の究極要素を取り出そうとした。そこでは、個人の例外的事例は究極要素へと分解されるものでしかない。だがミードは、そのような究極要素など存在しないとして合理主義をも批判する。

ミードは、当代の「リサーチ科学」の「実験的方法」において、個人の例外的事例の意味と意義が適切にとらえられると考えている。リサーチ科学は「頑固な事実」を排除せず、それを説明しうる仮説を形成し、その検証を経て新たな科学理論を生み出していく。そのことにより、例外的事例の出現を通じた世界の変化を適切に説明しうる。つまり、ミードにおいて「科学の方法」とは例外的事例を出発点とした世界の不断の再構成過程をとらえる適切な手法であると考えられている。ミードは、このような「科学の方法」によって物的世界の変化だけではなくいわば社会的世界の変化をもとらえうると考えて

いた。すなわち「科学の方法」を社会へと適用しようと論じた。ミードはその試みを「道徳諸科学」論文で展開している。ミードの見るところ、現在の我々は、もはや我々に生じる様々な諸現象が神の偉大な力によって引き起こされるものだと考えていない。つまり、目的論的な世界観は我々に大きな影響を及ぼすことはなくなっている。その代わりに我々は自然の推移は機械的なものだと考えるようになっていく。ミードによれば、この機械論的な自然観に基づく我々の行為こそまさに科学の営みであり、それが自然のコントロールを可能にしてきた。

だが同時にミードは、我々がこうした科学を未だ十分には活用し得ていないと見ている。その典型としてあげるのが、第一次世界大戦である。ミードによれば、大戦の中で科学が用いられたのは兵器の開発においてであり、戦争それ自体の可否を問う態度はいわば目的論的な、非常に古い精神態度であった。とはいえ、こうした例があるからと言って、ミードは「科学の方法」が社会の目的や価値にかかわる諸問題へと適用することができないとは考えない。むしろ逆に、ミードは「科学の方法」を社会の諸問題へと適用していくことが可能であると見ている。ミードはその具体例として、公衆衛生の進展により、それまでは不可侵であり変更不能であると思われていた社会の諸価値が変化したことをあげている。ミードはその上で、「科学の方法」の適用とは、対立し合う諸価値をすべて取り上げ、それを再構成して、仮説としての理念を提示することであると主張している。社会の諸問題は不可侵と思われる価値が対立している状態であるが、どちらかの価値を優先するような態度である限り、問題は解決しない。そうではなく対立する諸価値をデータとして取り上げ、仮説としての理念を提示することにより、問題が解決されるとミードは考えていた。つまり、ミードは社会的世界における例外的事例の発生を契機とした社会変化をどう描き出せるかを「科学の方法」論で得た思考の枠組みを利用して考えたのであった。それによると、社会的世界における例外的事例が発生する場合、そこには互いに不可侵な価値が対立するという状況が生じる。その価値を再構成することを通して新たな社会的世界が出現するということになる。

第3章では、ミードが「科学の方法」をホワイトヘッドの相対性理論を批判的に摂取することによってさらに精緻なものにしていることに注目し、彼の「諸パースペクティブの客観的実在」と題する論文を検討した。ミードはこの論文の冒頭で、絶対的観念論においては正当に取り扱われることのなかった個人の経験を適切に取り扱おうとする試みが生じつつあることを指摘する。ミードによれば、それは行動主義心理学とホワイトヘッドの相対性理論における試みである。このうちミードはホワイトヘッドの相対性理論を読解し、そこから大きな示唆を得ている。ミードはホワイトヘッドの相対性理論を彼なりに摂取して、個人の知覚しつつある出来事が生み出す個体と環境との一致集合として、当の個人の世界が自然において客観的に実在していることを明らかにした。ミードはこのことを諸パースペクティブの客観的実在と表現した。つまり、個人の経験、例外的事例は有限な自我が生み出す歪曲物ではないことを明らかにした。その上でミードは、ホワイトヘッドの議論を手がかりにしつつ個別パースペクティブと共通パースペクティブという新たな概念を提示し、個別パースペクティブと共通パースペクティブの一致という事態を検討して、個人の主観的なパースペクティブの出現と共通パースペクティブとの交差を契機とした世界の変化の過程を描き出した。ミードはその過程を自然の創造的前進の一例とみなした。

以上第2、3章で検討した一連の「科学の方法」論からは、ミードの議論が、世界ないし社会が不断に生成、変化し続けることを前提とし、その変化の出発点を例外的事例の発生に見るといった基本的な論理構成を有していることが明らかになった。このことをふまえて、第4章では彼のいわゆる社会心理学を検討した。第4章ではまずミードの社会心理学における基礎概念である社会的行為について検討した。ミードによれば社会的行為は、1個体以上の複数の個体の行為が互いに関係し合い、その全体として生じる何らかの出来事のことである。この行為は人間だけでなくすべての生命有機体が営むものであ

り、それが生命有機体の生存を支えている。

ただしミードの見るところ、そうした社会的行為がどのように進行するのか、いわばその進行原理については、人間以外の生命有機体と人間のそれとは異なる。すなわち、昆虫社会と動物の社会における協同活動のメカニズムはそれぞれ生理学的分化と本能であり、人間の協同活動のメカニズムとは異なるものである。

ミードは、昆虫や人間以外の動物とは異なり、我々人間には、特有の社会的行為の進行原理が存在すると考える。そのことを考えるためにミードは交換という行為をあげて検討している。ミードによれば交換は個々人の売却や購買という行為をその部分として成立する社会的行為である。そうした行為は、例えば木の実によって引き起こされている。つまり木の実売り手と買い手に同時に異なる複数の行為を引き起こし、全体として交換という社会的行為を成立させている。この、社会的行為にとっての刺激となるものを、ミードは社会的対象と呼んでいる。ミードは、この社会的対象が社会的行為すなわち人間における協同活動を可能にし、そうした社会的行為が社会を組織化していると考えている。

続けてミードは、我々がこうした社会的対象を手がかりとして実際にどのように社会的行為を進行させていくのかについて検討している。ミードの見るところ、社会的行為を遂行する我々が行っているのは、現在進行中の他者の行為を自分自身に取り入れること、すなわち他者の役割を取得することである。ミードはこの他者の役割取得のメカニズムを、我々の自我発達の過程の中から取り出そうとしている。ミードによれば、我々の自我発達にはプレイとゲームの二つの段階がある。我々はプレイにおいてもゲームにおいても他者の様々な役割を取得し、その経験を通して自我を発達させていく。ミードの見るところ、この二つの段階の違いは、プレイにおいては他者の役割を一つ一つ取得することで生じる複数の行為が互いに関係づけられていないのと対照的に、ゲームにおいては子どもが遂行する行為が互いに緊密に結びつき、ゲームという一つの全体を形成しているというところにある。

ミードはゲームにおける子どものこの役割取得のプロセスに人間の社会的行為のモデルを見いだしている。ミードによれば、ゲームの論理ないしルール観点から組織化された役割をこなす他者は、個別具体的な他者ではなく、ゲームの論理ないしルールを体現する他者として存在している。ミードはそうした他者のことを一般化された他者と呼び、ゲームの参加者がこの一般化された他者の役割を取得することによって、ゲームという社会的行為すなわち協同活動が可能になっていると考えた。これがミードがゲームの検討からとりだした、人間における社会的行為の過程であった。

さらにミードは、社会的行為の再編成過程についても分析した。ミードの見るところ、社会的行為が中断したとき、我々が社会的対象に注意を向け、その性質を分析し、それを変化させるなどして新たな社会的対象を形成するとき、社会的行為はそうした新たな社会的対象を手がかりとして再開されることになる。つまり、我々の社会の再組織化は、新たな社会的対象の出現とそれによる新たな社会的行為すなわち協同活動の進行によって生じる。

以上、第2章から第4章までの検討をふまえて、第5章では一連の検討から得られた知見についてまとめた。第2章で見てきたように、ミードの思考においては進化論が重要な位置をしめている。進化とは従来圧倒的な力をもつ自然に対して個体が適応することと考えられてきたが、いまや個体と環境それぞれが互いに対して影響を与えあい、両者が常に変化し続けることが明らかになっている。ミードは当代の進化論が示した個体と環境についてのこの発想を、彼の思考のもっとも根底に据えている。

注目すべきことに、ミードにおいて、その発想が適用される範囲が、物的自然に限らず我々を取り巻く全世界の全領域にわたっている。すなわち「倫理」や「科学」などの領域においてもそれは有効である。ミードのこの立場をとるなら、倫理や科学もまた、永遠不変の知の体系としてではなく、その中に

変化のメカニズムを内包したものと見なされることになる。ミードは古代ギリシア哲学から近代の科学理論までを概観しながら、科学理論がいかにその中に変化の過程を内包してきたかを検討している。すでに見てきたように、ミードのこの一連の作業が彼の「科学の方法」論として結実しているのだが、筆者の見るところ、ミードはこの「科学の方法」論の検討を通して、彼自身の思考の根底にある進化という概念を彫琢しようとしているように思われる。ミードは「科学の方法」論において、近代における「リサーチ科学」が「実験的方法」を採用し、例外的事例から仮説を形成するという過程を通して、自らよってたつ理論を絶えず変化し続けていることを指摘した。この過程、すなわち例外的事例の出現を起点とした理論の変化という過程は、まさに進化の過程である。

また第3章で見たように、ホワイトヘッドの相対性理論を摂取して書き上げた「パースペクティブ」論文において、ミードは個体の知覚しつつある出来事が当の個体にとっての世界を形成していること、それが個別パースペクティブと呼ばれるものであること、個別パースペクティブは確かに存在し、自然の厚板を構成していること、そうした個別パースペクティブは時に、当座は特定の個体にしか実在し得ない主観的パースペクティブとなっていること、そうした主観的パースペクティブが共通パースペクティブと一致していくことを通して新たな共通パースペクティブが形成されていくという過程が存在すること、その過程が自然の創造的前進と呼ばれる過程であることを縷々説明している。この一連の説明もまた、ミードの思考の根底にある進化という概念をホワイトヘッドの概念を援用して、より一般的な形式で述べたものと見てよいだろう。このように、ミードにおいては、「科学の方法」論は彼自身の思考の出発点である進化という概念を彫琢していくために欠かせないものであったと思われる。

本論文においては、「科学の方法」論の持つ性格を以上のようにとらえ、そうした「科学の方法」論と不可分のものとしてミードのいわゆる社会心理学を検討してきた。第4章で見たように、ミードは昆虫や人間以外の動物の社会も含めたおよそありとあらゆる社会が、協同活動という原理で成立していることを指摘する。その上で、ミードは人間においてこの協同活動がいかなるメカニズムによって成立しているのかを明らかにしようとしている。その際ミードは、人間の自我の社会的な形成と発達の過程を取り上げ、そのメカニズムを検討している。すなわち「プレイ」、「ゲーム」、「一般化された他者」といった概念を用いながら、子どもの自我発達の過程を詳細に分析する。その中で、ミードは「ゲームの論理」ないし「ルール」を通して形成される一般化された他者の役割取得という、ゲームの組織化のメカニズムを見いだしたのであった。

ここで注目すべきは、ミードのこの一連の議論が、協同活動の人間におけるメカニズムの解明という課題を達成するべく展開された理論営為の途上で登場してきているということである。このことをふまえて、あらためて彼のいわゆる社会的自我論、自我発達論のミード社会心理学における位置をを検討したが、その結果、自我の社会的形成や発達という論点から読み込まれてきたミードの社会心理学に、まさに社会の生成原理とその変化（再編成）の過程に関する原理的検討という側面があることが明らかにされた。ミードの社会心理学に見られるこの側面には、「科学の方法」論を積み重ねていくことを通して自らの進化という発想を鍛えあげた成果が反映していると見てよいだろう。

さらに興味深いことに、以上のことを念頭に置きながら第1章でふれたミードの種々の「実践」をあらためて考えてみると、そこにおいても今述べたようなミードが見えてくる。すなわち、ミードの社会実践活動は“例外的事例が生じている現状についての分析と、それを手がかりとした新たな社会的行為を展開しうる条件の探求”という大きな枠組みの中で理解することができる。このように、ミードの「科学の方法」論から彼の思考の特質を引き出し、それが社会心理学の展開においても重要な意味を持つと考えてあらためて社会心理学を検討するという、本論文における作業を通して、それら全体から浮

かび上がるミードの思考の基礎視角は、彼の実践の意味をもこれまでとは異なる形でとらえ直す手がかりとなりうる。こうした、ミード理論の基礎視角を彼の理論それ自体から引き出し提示したこと、これが本論文における最大の成果である。

論文審査結果の要旨

本論文は、ジョージ・ハーバート・ミードの公刊論文のなかから「科学の方法」論と呼ばれるべき一連の著作群を抽出しその基本的な論理構成を解明するとともに、そこでの論理を手がかりにして、ミードの社会心理学理論を社会の生成・変化の論理を解明する社会理論として位置づけなおすことをこころみたものである。

論者は、第1章「G.H.ミード社会心理学の研究に向けて」において、ミードにかんする従来の研究動向を概観し、みずからの研究視角と研究方法を明らかにする。論者はまず、日本におけるミード研究が、シンボリック相互作用論の影響のもとで展開してきたことを確認する。この種の研究において主として取り扱われてきたのは、『精神・自我・社会』に代表される社会心理学のテキストであり、そうした研究においては、人間の主体性や積極性、創造性を重視する議論としてミード理論が読み込まれてきた。その後、1980年代の半ば以降になると、ミード自身の議論にそくしてミード理論を理解しようとする研究が盛んになされた。そのなかで「科学の方法」論の探求もまた、一つの重要な論点として浮上した。他方、欧米のミード研究では、ミードについての知識社会学的研究が進展した。ミードが実際にどのような社会活動に関与していたかが具体的に明らかにされてきた。論者は、ミードについてのこのような研究状況をふまえ、「科学の方法」論と社会心理学理論とを一体的に理解する作業が重要であると主張する。

論者は、「科学の方法」論と社会心理学理論の二つが、ミードにとって中心的な主題であったことを強調する。そのうえで、「科学の方法」についての議論の深化がミードの社会心理学理論の完成にとって重要な鍵を握っていると判断する。そのような観点から、「科学の方法」をめぐる議論として、「倫理の哲学的基礎」(1908年)、「科学の方法と、考える個人」(1917年)、「科学の方法と道徳諸科学」(1923年)および「諸パースペクティヴの客観的実在」(1927年)の各論考を取りあげ、その内容を検討するとともに、ミードの「科学の方法」論の深化を跡づける。さらに論者は、1928年および1930年の「高等社会心理学」の講義においてミードの社会心理学理論が完成をみたのみならず、この講義は、ミードの死後モリスによって編集されて『精神・自我・社会』として公刊されている。しかし、この編集には問題が多く、ミード本人の考えを必ずしも精確に伝えていないことが、すでにミード研究者のあいだでは常識となっている。論者は、もともとの講義の速記ノートにあたり、内容を確認することによって、ミード本人による論理構成を解明する。論者は、1920年代後半までにみられる「科学の方法」論の深化をふまえて、社会心理学理論の体系を讀解することの重要性を主張する。

第2章「ミードの「科学の方法」論」において論者は、まず「倫理の哲学的基礎」論文(1908年)を検討する。ここで論者は、進化についての理解の深化により、個体と環境との相互規定的な関係という認識がミードにおいてみられることを確認し、そのような基底的な論理にもとづいて倫理というものが取り扱われていることに注目する。個体と環境の相互規定という論理にもとづけば、共同体の価値というものを所与の前提とするわけにはいかない。個人の行為がそれまでの制度や慣習からはずれているからといって、それはただちに逸脱を意味するわけではない。むしろ新たな道徳の形成のための端緒をなす可能性がある。既存の制度や価値を所与の前提にできないとするならば、「何をなすべきか」という問

いにこたえるためには、現状を精確に調査するということから出発しなければならない。こうした状況のなかでミードが強調したのが、「科学の方法」であったとされる。

ついで論者は、ミードの想定する「科学の方法」の特質を明らかにするために、「科学の方法と、考える個人」論文（1917年）を検討する。論者によると、この論文のなかでミードは、近代科学の特徴として例外的事例の重視という点を指摘している。近代科学において例外的事例は、既存の理論の限界を明らかにし、新たな理論の形成を促す契機として作動している。科学者は、例外的事例に着目し、そこから仮説を形成し、理論を修正していく。しかも、ミードの考えによれば、これは、たんなる科学者の側の認識や構えの問題ではない。まさしく世界そのものが不断に変化し続けている。だからこそ、例外的事例の重視という方法的な態度が要請されるということになる。

第3章「科学の方法」論の展開」において論者は、「諸パースペクティブの客観的実在」論文（1927年）を取りあげ、この論文において、「科学の方法」をめぐるミードの理論が深化をとげたことを解明する。論者によると、この論文において、ミードはホワイトヘッドの相対性哲学を批判的に摂取し、自然とは自然の中に存在する諸パースペクティブの組織化であるという着想をえた。そのうえでミードは、このパースペクティブ概念を個別パースペクティブと共通パースペクティブとの二つに区分し、個別パースペクティブと共通パースペクティブの一致という考え方を使って、「科学の方法」を説明する。

第4章「ミード社会心理学の検討」において論者は、1928年および1930年の「高等社会心理学」講義ノートをもとに、ミードの社会心理学理論を検討する。論者によれば、その端緒範疇をなすのは社会的行為である。ミードの社会心理学を自我論や社会的コミュニケーション論として位置づける立場からすると、その端緒範疇は、自我や有意味シンボルということになる。しかし、ミード本人の論理展開にそくしてみると、人間という種に特有の進化的な獲得物から出発してはいない。他の有機体にも適用可能な社会的行為という概念から論理体系を出発させている。そのうえで、人間という種に特有な社会的行為のメカニズムの解明に進み、役割取得や自我発達の問題がその延長線上で語られることになる。本論文では、「科学の方法」論の論理構成を確認した上で、その視角から社会心理学講義を検討していった。ミードの社会心理学理論は、従来のミード研究では自我発達の理論や社会的コミュニケーション論としてとらえられていたが、本論文の観点からすると、社会の生成・発展の理論として読み直すことが可能とされる。

最後に第5章「要約と結論」においては、本論文の内容があらためて確認され、本論文の到達点が明らかにされる。

以上のように、本論文では、1908年から1927年にかけて発表された一連の論考をもとにミードにおける「科学の方法」論の深化を跡づけ、そこからミードの思考の基本的な論理構成が確認された。さらに、そこで確認された基本的な論理をふまえて、1928年および1930年の「高等社会心理学」講義を素材とし、社会心理学理論の論理構成がテキストにそくして解明された。本論文は、このような手順にもとづき、「科学の方法」論と社会心理学理論とを一体のものとして解読するという作業をおこない、ミードの社会心理学理論を社会の生成・発展の論理を解明する社会理論として描きだすことに成功している。本論文は、ミード研究に新たな局面を切りひらいたばかりでなく、社会学理論の学説史的研究の進展にも寄与するところが少なくない。

よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。